

## ちひろ美術館コレクションについて

執筆者：上島史子

掲載誌：静岡市美術館展覧会図録『ちひろ美術館 世界の絵本原画コレクション展 絵本をひらくと』（静岡市美術館発行 2015年10月）

## ちひろ美術館コレクションの成り立ち

ちひろ美術館は今年で開館38年が経つ。いまでこそ国内外に絵本美術館が増え、絵本の原画展も数多く開催されているが、ちひろ美術館の開館当初は、まだ絵本の原画に美術的価値を認める人は多くはなかった。

日本の第二次世界大戦後の絵本の動向を振り返ってみると、終戦直後の混乱期を経て、1950年代には「岩波の子どもの本」や福音館書店の「こどものとも」が創刊、1960年代に入ると絵本に取り組む出版社が増えて、赤羽末吉や長新太、瀬川康男、田島征三ら個性的な画家たちが多様な絵本表現を展開しはじめた。「絵本ブーム」と称された1970年代には、絵本の出版点数が急増、絵本の専門雑誌も創刊されて盛んに絵本論も語られるようになった。いわさきちひろもまさにそうした日本の絵本の隆盛期に活躍した画家であり、絵本とはなにかを模索し続けたひとりである。しかし、その最中の1974年、惜しまれつつ55歳で亡くなった。

ちひろ美術館が開館したのはちひろの没後3年の、1977年のことである。「ちひろの絵をいつでも見られる場所を」という声が寄せられるなか、ちひろの遺族から彼女の全作品とその著作権の一部の寄贈を受けて、1976年に財団法人いわさきちひろ記念事業団（現在は公益財団法人）を設立、東京都練馬区下石神井にあった自宅の敷地の一角につくられた小さな美術館だった。ちひろの一人息子である松本猛は、芸術学を専攻していた学生時代に、ちひろが完成させた最後の絵本となる『戦火のなかの子どもたち』の制作に関わったのをきっかけに絵本研究に取り組むようになり、この美術館の設立に尽力した。開館当初の名称「いわさきちひろ絵本美術館」（現在は「ちひろ美術館・東京」）には、ちひろだけでなく、広く「絵本」の文化に寄与したいという思いが込められている。絵本を専門とする美術館としては、世界で最初の美術館であることは、後からわかったことだったという。

そもそもちひろが印刷美術の画家として活躍を始めた頃は、画家の著作権すら認められていなかった。1964年にちひろをはじめ、当時の画家たちが日本児童出版美術家連盟（童美連）を結成し、粘り強く著作権確立の運動をおこない、ようやく画家の手元に原画が返却されるようになったのである。しかしその後も原画は印刷原稿として粗雑に扱われがちであり、損傷や紛失が起きることも度々だった。絵本では印刷されて製本されたものが作品となるが、原画には印刷では伝わりにくい筆触や画材の質感も見ることができ、そのものが絵画としての魅力を持っている。絵本原画を美術館で展示することは、絵本の美術的な価値を世のなかに問うことでもあった。

世界の絵本画家コレクションの収集が本格的にはじまったのは1980年代半ばに入ってから

らのことである。ブラティスラヴァ世界絵本原画展（BIB）やボローニャのブックフェアなどを松本が訪れた機会に、海外の画家たちに出会い、その作品を目にしたことがきっかけとなった。海外においても日本と同様に、あるいはそれ以上に絵本原画の保存に対する意識が希薄であり、歴史的に重要な絵本の原画でさえ散逸し、たとえ画家や遺族のもとに残っていたとしてもその保存状況は決してよいとはいえないものが多かったという。「ちひろ美術館が本格的に絵本画家のコレクションをしようと考えはじめた理由は、絵本原画の価値と保存の重要性に気がついたからにほかならない。たとえ微力であっても、後世にそれを伝えていく努力をするべきだと判断したのである。」と松本は語っている。原画を後世に残し、広く公開していきたいという美術館の理念に、多くの絵本画家たちが共感を寄せ、作品を譲ることに同意してくれて、コレクションは増えていった。

東京のちひろ美術館の開館 20 周年となる 1997 年には、長野県の北安曇郡松川村に安曇野ちひろ美術館も開館し、コレクションを安全に保存できる収蔵庫と、ちひろの作品とともに、世界の絵本画家たちの作品を恒常的に紹介できる展示室も設けた。また、当館のコレクションの柱のひとつとなる「絵本の歴史」の展示室も設け、古代エジプトの「死者の書」にまでさかのぼるイラストレーションの歴史も紹介している。

#### いわさきちひろ

当館のコレクションの出発点となったいわさきちひろの作品は、約 9450 点が収蔵されている。そのなかには 40 冊あまりの絵本の原画の他に、絵雑誌や童話集、教科書、広告、カレンダーの仕事、初期から晩年までのデッサンやスケッチ、油彩画なども含まれていて、ちひろの画業の全体が見渡せるようになっている。原画の他にもその人生や人柄を伝える資料類や、ちひろが影響を受けた画家たちの作品も収蔵の対象となっている。東京と安曇野、ふたつのちひろ美術館を合わせると、これまでさまざまな切り口から 260 回を超えるちひろの展覧会に取り組んできたことになる。

いわさきちひろは戦後間もない時期に画家として生きることを決意し、子どもの本の世界で活躍をした画家である。ちひろの生涯のテーマは「子ども」であった。まだ女性の画家が珍しかった時代、母親の眼差しを通して描かれた子ども像は、多くの人の共感を得た。絵本においても感受性豊かな子どもの心を表現しようと試み、「感じる絵本」と呼ばれる独自の絵本表現を生み出している。また、娘時代を戦争が迫りくるなかで過ごし、空襲のなかを逃げ感った経験も持つちひろにとって、反戦への思いは切実だった。そんなちひろの「世界中のこどもみんなに平和としあわせを」という言葉に象徴される願いは、ずっと変わらず、当館の活動の根幹になっている。

#### 世界の絵本画家コレクション

現在収蔵されている世界の絵本画家の作品は、世界 33 カ国 203 人の画家による約 17300 点にのぼる（2015 年 7 月現在）。

ここには小さなノーベル賞ともいわれる国際アンデルセン賞画家賞受賞者であるモーリス・センダック（アメリカ）、タチヤーナ・マーヴリナ（ロシア）、赤羽末吉（日本）、ドゥシャン・カーライ（スロヴァキア）、クヴィエタ・パツォウスカー（チェコ）、クラウス・エンツィカート（ドイツ）、アンソニー・ブラウン（イギリス）、ロベルト・インノチェンティ（イタリア）をはじめ、ブラティスラヴァ世界絵本原画展（BIB）、ボローニャ国際児童図書展など国際的な絵本賞の受賞者が多数含まれている。

また、世代を超えて読みつがれ、ミリオンセラーとなった絵本の原画も多い。あかちゃん絵本として圧倒的な人気を誇る『いないいないばあ』（松谷みよ子文 瀬川康男絵 童心社）をはじめ、『スーホの白い馬』（大塚勇三再話 赤羽末吉絵 福音館書店）、『わたしのワンピース』（西巻茅子作 こぐま社）、『てぶくろ』（ウクライナ民話 エフゲーニー・ラチョフ絵 福音館書店）などがあげられる。世界 33 の言語で出版され、世界中の子どもたちに愛されている『はらぺこあおむし』のイメージをもとに描かれたエリック・カールの 1 メートル近い大きさの作品もある。

一方で日本ではほとんど知られていないアジア、中南米、アフリカの画家たちの作品もある。絵本の出版が難しいこうした地域の画家を対象にした野間国際絵本原画コンクールがコレクションのきっかけとなった。コスタリカの画家ウェン・シュウの「ナディとシャオラン」は、自分のルーツでもある中国の切り絵（剪纸）と、パナマのクナ族の伝統手芸であるモラを見事に融合させた作品だ。地域の文化や自然に根差しながら、画家の個性が発揮された絵画表現は新鮮で、絵本先進国のヨーロッパやアメリカの画家たちにもひけをとらない。優れた表現力を持った絵本画家が世界中にいること、どの国や地域の文化もそれぞれに魅力的であること、子どもたちに心を寄せて描いた絵本は国境や世代を超えて伝わることを、当館のコレクションは物語っている。

コレクションのなかには、ちひろ以外にも画業の全貌が見渡せる一群の作品が収蔵されている画家がいる。赤羽末吉はその全遺作約 6900 点が、画家の遺族から寄贈された。長く旧満州に暮らした経験を持つ赤羽が絵本に取り組むようになったのは、50 歳を過ぎてからである。物語の確かな解釈と徹底した調査、演劇や映画から学んだ演出手法、日本の伝統的な美術を取り入れた絵画技法により、日本や中国の民話絵本をはじめ、幅広いジャンルの絵本に取り組み、国際アンデルセン賞画家賞を日本人として最初に受賞した。

茂田井武は戦中から戦後の日本が最も混乱していた時代に子どもの本の世界で活躍しながら、絵本の隆盛期を待たずに 48 歳で早逝した画家である。素朴な詩情とユーモアに満ちた絵は、当時の子どもたちをおおいに楽しませたが、まだ著作権のなかった頃でもあり、印刷原稿として大半が失われた。しかし家族のもとで大切に守られてきた作品や画帳、手作り絵本など約 770 点が寄贈され、今も多くのファンを魅了している。

長新太の作品も、収蔵作品と寄託作品をあわせると約 5900 点にのぼる。漫画家から出発した長は、奇想天外な発想で、絵本にナンセンスの分野を切り開いた。長の絵本は子どもたちに絶大な人気を誇っている。

他にも、収蔵・寄託されている作品が 100 点を超えている画家には、岡本帰一や初山滋、瀬川康男、チェコのクヴィエタ・パツオウスカー、ポーランドのユゼフ・ヴィルコン等がいる。今後も作家研究を深め、展覧会や出版を通してその画業を広く伝えていきたい画家たちである。

戦後 70 年が経ち、日本の視覚文化としては漫画やアニメーション、コンピューターゲームなどが注目を集め、インターネットや SNS で世界中に情報が飛び交う今、絵本の出版の状況は厳しさを増している。しかし、ちひろ美術館で目を輝かせて絵本に見入る子どもたちの姿を日々見るにつけて、絵本が子どもたちに果たす役割の大きさを感じている。今後も絵本の動向を見続け、コレクションを大切に育てながら、他機関とも連携して絵本の文化の発展に資する活動を続けていきたい。

注)

ブラティスラヴァ世界絵本原画展（略称 BIB=Biennial of Illustrations Bratislava）

ユネスコと国際児童図書評議会（IBBY）の提唱により、1967 年から隔年で、スロヴァキアの首都ブラティスラヴァで開かれている国際的な絵本原画コンクールの入賞作品による展覧会

国際アンデルセン賞

1953 年、国際児童図書評議会（IBBY）により創設された賞で、長らく子どもの本に貢献したと認められる作家や画家の全業績に対し、2 年に一度与えられる。画家賞は 1966 年から授与されている。

ボローニャ国際絵本原画展

イタリアのボローニャで毎年開催されている児童書専門のブックフェア（Bologna Children's Book Fair）に伴うイベントのひとつとして、1967 年に始まった絵本原画コンクールの入選作品による展覧会。

野間国際絵本原画コンクール 優れた才能を持ちながらも作品発表の機会に恵まれない、アジア（日本は除く）、太平洋、中南米、アフリカの各地域とアラブ諸国の画家を対象に開催した原画コンクール。財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）の主催により、1978 年から 2008 年まで隔年で 16 回開催された。